

小学校外国語の検定教科書を使って「総合的な学習の時間」との効果的な教科横断的アプローチを
探る実践研究 - 「指導と評価の一体化」を目指して -

阿部始子（東京学芸大学外国語・外国文化研究講座英語科教育学分野）

○中村香（東京学芸大学附属小金井小学校）

遠藤信幸（東京学芸大学附属小金井小学校）

齊藤和貴（京都女子大学発達教育学部教育学科）

代表者連絡先：mabe2015@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】小学校外国語・総合的な学習の時間・他教科連携・実践研究・指導と評価

1 はじめに

2020 年度の移行期間を経て、小学校外国語の授業が本格的に開始された。小学校高学年を対象とした小学校外国語科(以下外国語)の検定教科書も発行され、授業の具体的なガイドラインは示された。しかし、小学校教育の中で外国語がどのような学びを創造し、他教科と効果的に連携させることで、子どもたちの学びをどう深めていけるのかについては、まだ十分な研究の蓄積がない。また、人・モノ・コトが急速にグローバル化する社会において、言語や文化の違いを超え協働して現代的諸課題に取り組むことが世界的に求められているが、その解決に資する基礎的な資質や能力を育成するためには、外国語だけではなく、教科を超えた学びのつながりが必要である。

「総合的な学習の時間」(以下総合)の歴史的な経緯を概観すると、総合と社会・理科などとの教科横断的なカリキュラム開発は多いが、総合と外国語の教科横断的な授業実践は十分に広がっていないことが示唆された。その背景として、外国語という新しい教科の実践の蓄積が不足していることもあげられるが、教科横断的な授業実践において、どのような資質・能力の育成を共通の目標とし、指導と評価の一体化を目指した具体的な評価方法を示すのが難しいことがあげられる。

外国語と総合で培う資質・能力の共通項として見いだせたのは、総合の「探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う」と、外国語の「グローバルな視点を持ち、外国語を用いて社会(世界)に発信する姿勢を培う」という点で、共に世界や社会とどのようなかかわりを持って生きるかという人間性や主体的な学びに関わる資質・能力であった。また教科横断的な視点から育てたい資質・能力としては、学習の基盤となる資質・能力(加藤, 2019)として言語能力・情報活用能力・問題発見能力といった「機能的学力」と、②現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力(文部科学省, 2017)があげられた。

2 本プロジェクトの目的

そこで、本研究では外国語と他教科を連携させる実践研究を行い、現代的諸課題を解決するための資質・能力を総合的に育成する授業提案を目的とした。具体的には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方や考え方を働かせ、言語活動を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成する」という外国語の目標を踏まえつつ、総合における探究的課題の解決を通して、外国語と総合(及び道徳)で習得する「知識および技能」が相互に関連づけられながら、情報の収集・整理・分析、まとめ・表現などの学習過程において「思考力・判断力・表現力等」に関連する力を身に付けられるようにすると共に、主体的に他者と関わりあいながら外国語を使って社会や世界とどのように関わって

いくのかについて学んでいく児童の姿を目指した。そのための評価の観点として、上記した機能的学力及び現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を加えた。2021年度は後者の特に食に関する力・新たな価値を生み出す豊かな創造性・グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力に着目した。2022年度は、SDGs全般を視野に入れ、児童が自発的に取り組みたいテーマを選び、SDGsを達成するために行動する様々な人の生き方を知り、自分の行動を振り返り、主体的な姿勢を育成することを目的とした。

3 本プロジェクトの内容及び成果

2021年度は、『New Horizon Elementary 6』（東京書籍）のUnit 6 Let's think about our food.を学習する際に、総合で培う資質・能力のうち 課題の解決に必要な知識及び技能を身につける、②実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析する、探究的な学習に主体的・協働的に取り組む、に焦点をあて、グローバルな視点を持ち、外国語を用いて異なる背景を持つ相手（ガーナからの留学生）に発信する姿勢を培うという外国語科の目標と関連付けながら単元を構想した。また、教科横断的な視点から育てたい資質・能力としての機能的学力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力、特にSDGs2「飢餓をなくそう」をテーマに食に関する力、新たな価値を生み出す創造性（ガーナでできる日本食）、グローバル化の中で多様性を尊重するとともに（食に対する異なる価値観の共有）、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力（グループで試行錯誤して行う発表）、自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力（日本・ガーナの地産地消）に着目した。実践研究に当たっては、総合や道徳の授業を担当する担任（遠藤）、その指導・助言をする大学教員（齊藤）、外国語科の専科教員（中村）、その指導・助言をする大学教員（阿部）の4人で協働し、カリキュラム作成、教材の精選、子どもの見取り、振り返りの分析などを行った。

結果、外国語を通じてガーナの留学生から直接話を聞くことで「飢餓をなくす」という課題の現実感が増し、総合的な学習の時間などでガーナの小学生の給食や食糧事情といったより詳しい情報から課題への理解を深めたこと（知識・技能）、外国語で発信する目的に注目させることで促された相手意識が、総合では留学生だけではなく自分の身近な料理をしてくれる人や生産者にも広がりを見せたこと（思考・判断・表現）、他国（ガーナ）の現状を知ること、自国や自分の生活上の課題に気づき、具体的な解決策を話し合うことで、行動への糸口を探る様子が見られたこと（主体的な学び）などは他教科連携の効果と推察される（表1参照）。また、機能的学力である言語能力や情報活用能力についても、視覚資料や留学生・JICA職員などの話から直接得た情報を活用し、自分たちの現状と照らし合わせて少しでも自分事としてとらえようとする姿勢が見られたり、異なる考えを共有し新しいアイデアを生み出すためのディスカッションへの参加が観察されたりした。また限られた種類や量の食材しか手に入らないガーナの食糧事情を考慮した日本食の提案といった相手の問題にも目を向け解決しようとする態度（問題解決能力の基盤）などは観察することができた。さらに、本単元での学習が、現代的な諸課題解決のための資質・能力である食に関する力、新たな価値を生む創造性、多様な価値観に触れ自己の生活を振り返る力、持続可能な社会をつくるための行動基盤となる価値観の見直しなどの機会にはなったことがうかがえた。この背景のとして、SDGs2「飢餓をなくそう」という共通テーマを設定することで、教科横断的な単元計画の枠組みが明確になり学習内容や目標を共有できたこと、授業資料の共有が容易になったこと、担任・専科の担当教科の枠を超えて相互に授業に参加し観察を通して児童の実態を把握できたことなど、英語専科と担任の協働体制を構築する努力の成果があげられるだろ

う。

表1 「総合的な学習の時間」等の振り返りの回答から得られたコードとその例

子どもの回答から得られたコード	例
日本の食品ロス問題を認識する	(日本では一人当たり) 毎日、お茶わん 1 杯残している。(M1)
日本やガーナの貧富の格差にきづく	(日本とガーナの) 貧困の差が大きい→(日本では) 食べ物があるのがあたり前になっている→食べるのこし (M2)
日本とガーナの貧富の格差の背景にきづく	少しの違い、「どこに生まれるか」で全て、かわる。かんきょう、食事、もう何もかも。 - 中略— 貧しい人々は、何もできない (F1)
食べ残しなどの自分の行動を振り返る	(私たちのクラスは) たくさんの残飯があって少しいやな思いになりました。(F2)
飢餓や不平等といった課題解決への提案する	その余った食料が「きが状態」の子にまわせばいいと思いました。(M3)
他の地球的課題へと意識が広がる	SDGs (ガーナの発展のために)・原地生産の方法(を考える)・ガーナの労働(力を生かす)。→発展。(M4)
国際協働の大切さを認識する	同じ地球なのに残飯がでる所と、食料がたりない所があるのは意外だと思った 食料が足りる国がたりない国にきふすればいいと思った。(M5)
国際協働の難しさを認識する	他の国が近いわけでもないから、あげるのもムズカシイ。(F3)
新しい課題の発見	日本と同じ、中国や、アメリカ、先進国の小学校なども、残飯は、あるのか、不思議に思いました。—中略—もし、食べ物を輸入している国が輸入ができなくなったら—中略—食べ残しなく食べれるのかとも思いました。(F4)
日本とガーナの価値観の違い(食べ残し)に気づく	まずしい人とゆうふくな人とは価値感、がちがう (M6)
他者の視点(ガーナの人)から自分を批評的に考える	ガーナ...ありがたみや大切さがわかっている。自分たち...(食品のありがたみを)少し軽く考えている人もいる。(F5)
他者の視点(食事提供者)から自分を批評的に考える	給食を作ってくれるだけでもありがたいのにたくさんのおいしい給食があって残飯があると、作ってくれた人はがんばって作ったのに...となると思います。(F6)
他者の視点(生産者)から自分を批評的に考える	輸入国に失礼 作ってくれている人に...。(F7)

*色付けした欄は「外国語」の振り返りでは見られなかったコード *M=Male、 F=Female

この 2021 年度の授業実践や実践研究は、2022 年 1 月 20 日の東京学芸大学附属小金井小学校における「英語提案授業・研究会：Let's think about our world.」というタイトルで校内研修の一環として報告され、続く 2 月 6 日には、『『ことば』や文化への理解を深め、生活を豊かにしようとする子の育成』という目標を掲げ実施された東京学芸大学附属小金井小学校研究発表会でも取り上げ、学外の参加者と共に公開授業に基づく協議会を開き、貴重なフィードバックの機会を得た。以上の研究の成果及び課題は、2022 年 6 月に開催された日本児童英語教育学会 (JASTEC) 第 42 回全国大会で「SDGs をテーマにした Let's think about our food.の発展的授業 - 『総合的な学習の時間』などとの効果的な教科横断的アプローチを探る実践研究 - 」というタイトルで発表し(発表者：阿部・中村) 同学会が発行する日本児童英語教育学会 (JASTEC) 紀要第 42 号(査読あり)に「外国語科と総合的な学習の時間を結ぶ探究的な実践研究—Let's think about our food.の単元を SDGs と関連付けて - 」(執筆者：阿部・中村・齊藤・遠藤)というタイトルで投稿した(査読結果は 2023 年 5 月に分かる予定)。

2022 年度の研究は、引き続き SDGs 全般について児童の興味・関心を広げ、現代的諸課題に取り組む姿勢を育成することを目標にした。具体的には、外国語の『New Horizon Elementary 6』(東京書籍)の Unit 8 My Future My Dream という単元で、様々な国の人たちが SDGs の課題解決に向けた自分たちの夢を語る「This is my dream.」という本を使用し、各国の事情を知るとともに、SDGs と関連付けて自分なりの課題を見出し、将来の夢を発表し合うという課題を設定した。総合では、国境を越えた医師団、世田谷区区議会議員などのゲストティーチャーを招いたり、川崎レナさん・マララ・ユサフザイさんといった SDGs の解決に取り組んでいる人たちの話を聞いたりして、日本語でより深く内容を理解し、自分の行動について振り返り、実際の行動に移すことを目標に設定した。これらの実践研究は、2023 年 2 月 5 日に「こえる学びの拡張」という研究テーマで実施された東京学芸大学附属小金井

小学校研究発表会で、学外の参加者に向けて発表した。2023 年 7 月に開催される小学校英語教育学会（JES）でも発表予定である。

4 課題

2023 年 3 月に、児童アンケートを実施した（4 件法：4 = とてもそう思う、1 = 全くそう思わない）。結果、外国語と総合を連携させたことによって、児童は学びのつながりを感じ、テーマについてより高い関心を持てるようになったようだったが、自分の行動変容までつなげた児童は多くなかったようだ（図 1）。また、共感や考え方の見直し、理解や知識の深まり、英語技能の習得、創造性の発揮、協働することへの積極的な姿勢などは見受けられるものの、課題解決に向けての取り組み（質問 8・12）、社会への貢献（質問 23）などの平均値は 3 以下となったことから、持続可能な社会をつくるために具体的な行動に移し、それを自ら評価し次の行動につなげるといった探究のサイクルを構築することは難しかったことが示唆され、課題として残った。今後は、教科をつなぐだけでなく、教科の学びが往還するような工夫が一層求められるだろう。

図 1 外国語と総合での学びのつながりについて（有効回答数 26：図 2 も同様）

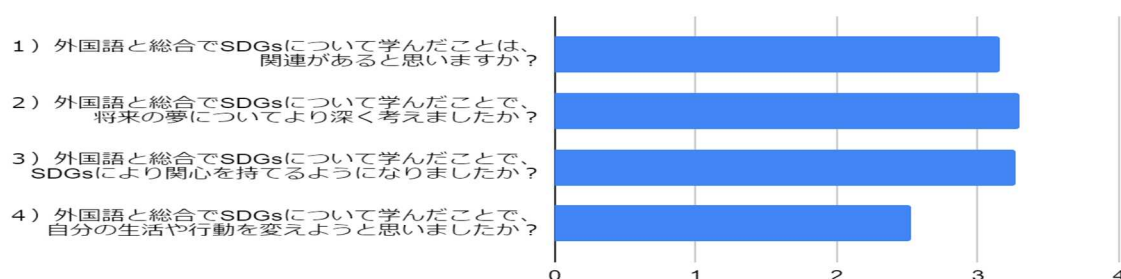
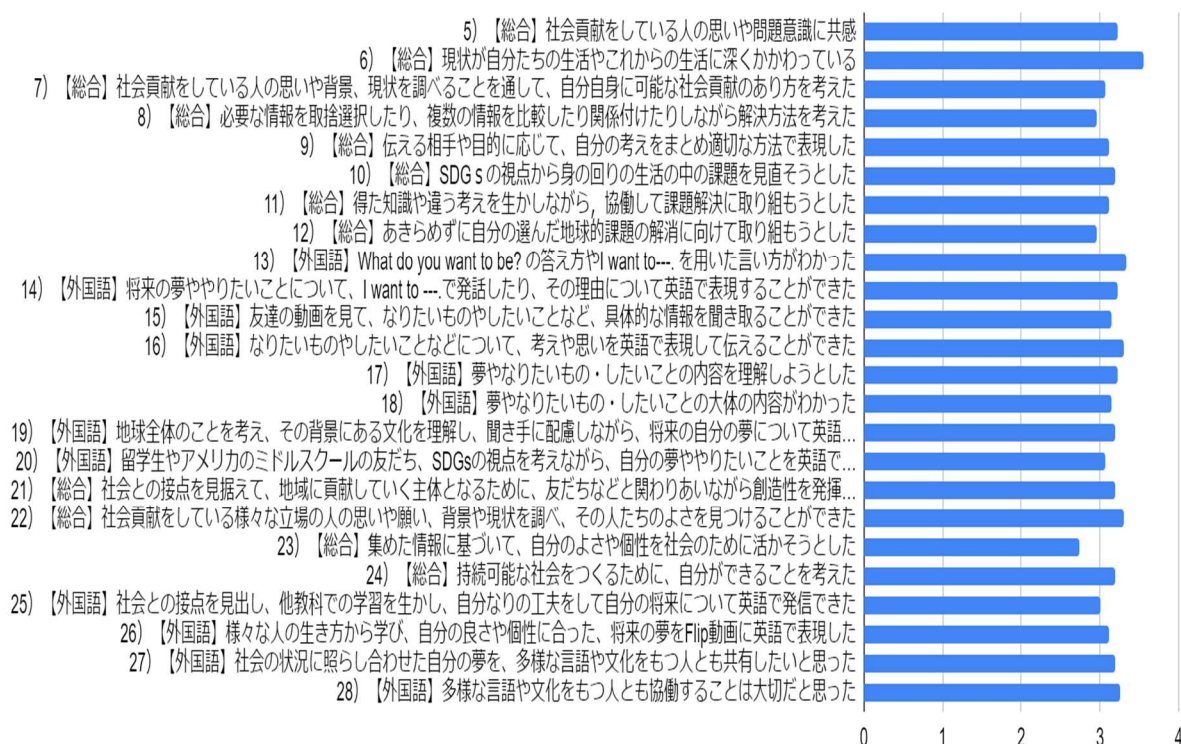


図 2 学習指導要領・機能的学力・現代的諸課題に取り組むための資質能力の評価の観点について



加藤幸次 (2019). 『教科等横断的な教育課程編成の考え方・進め方 - 資質・能力（コンピテンシー）の育成を目指して -』 黎明書房.

文部科学省 (2017). 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総合的な学習の時間編』 東洋館出版.